埼玉大学紀要　教育学部，68(2)：367－388（2019）

ジャーベイズ・フィンの学校小説における教職観

――その社会的・時代的・地域的な意味――

武　田　ちあき　　埼玉大学教育学部言語文化講座英語分野

キーワード：教職、学校小説、移民、サッチャリズム、ヨークシャー

1．序

現代イギリス学校小説のベストセラー作家、ジャーベイズ・フィン（Gervase Phinn, 1946- ）の『デールズ』シリーズ（*Dales* series, 1998-2010）第一作『谷の裏側』（*The Other Side of the Dale*, 1998）は、次の献辞で幕を開ける。

For Christine
and all other dedicated teachers who take on the most
important duty in society—the education of the young. (v)

（クリスティーンに
そしてすべての献身的な教師に。かれらが担うのは
社会で最も重要な務め――子どもの教育。）

フィンの妻クリスティーンは、元「ヨークシャー一の美人校長」。フィンは教員から州の視学官、のち作家に転身、という経歴の持ち主。この巻頭言は一行目で、処女作を愛妻に捧げる常套文句か、と一瞬思わせた後、二行目以降で、じつはその域をはるかに超え、教師代表に妻を据えて、彼の多彩な半生を貫く教職観を、物語の冒頭に昂然と銘記したものであるとわかる。

ここで提示された主題は作品中、随所でさまざまに変奏される。それを最も簡明に約言しているのは“Teaching is the best job in the world”（教育が世界で一番いい仕事）という表現だろう。日本の教員志望の学生にはごくあたりまえで、陳腐にすら響くかもしれない文言。あるいは民間企業の社員が言えば、やっかみや軽侮も混じりかねない台詞。しかしフィンが育ち、教え、書いてきた時代と社会と文化の状況において、これは特別な意味と意義を発揮する、きわめて政治的なプロパガンダであり、真に感動的な決意表明だったのだ。

本稿では、フィンの眼前に展開する特定の「世界」が、いかに「教育」を困難にする逆境であったかを、社会的・歴史的・地理的条件のそれぞれから跡付け、その中で信念を通すフィンやクリスティーンら、英国の教師たちの格闘の意義を明らかにするとともに、そのドラマが文学作品の形態で国民に共有されることの現代的意味を考察したい。

2．アイルランド移民、労働者階級――社会的状況

2-1　貧しい階級の出身

フィンの自伝『谷への道』(*Road to the Dale*, 2010) で最も心を打つ一節は、フィンを説得する恩師のことばである。

> “You want to teach, lad, teach. That’s your future—teaching—inspiring young people. It’s the best job in the world. You think on, Phinny, teaching’s for you.” (394)
>
> (「きみは教師をしなきゃいかん、いいかい、教えるんだ。それがきみの未来だ――教えるんだ――若者を奮い立たせるんだ。それが世界で一番いい仕事だぞ。あきらめるな、フィンくん、教師がきみの天職だ。」)

南ヨークシャーはロザラム (Rotherham) の貧困地区に生まれたアイルランド移民の息子フィンは、イレブン・プラス（11歳で受験する中等学校進学試験）で不合格となり、グラマー・スクールに行けず、事実上、大学進学への道を断たれる。しかし入学したセカンダリー・モダンの教師陣は、イレブン・プラス落第生たちを鼓舞し、熱心に指導する。大学入学資格試験のOレベルで優秀な成績を収めつつも、フィンは母親のコネで、会計事務所への就職を堅実に決める。それを聞いた教員がフィンに進路を思い直すよう、諭す場面である。

> “Whatever do you want to be a trainee accountant for?”
> “It’s a good job, sir.” (394)
>
> (「いったいぜんたい、なんだって、会計士見習いなんかになりたいんだね？」
> 「いい仕事ですから、先生」)

このフィンの返答を受けて、分相応の仕事ではなく最上の仕事に就け、と猛烈に反駁したのが冒頭の熱弁なのである。

数日後、ロザラムの町の教育長に呼び出されたフィンは、教員養成大学に進学すべくAレベルを受験するよう強く勧められ、“We need people like you in our schools” (396)（「きみのような人こそ、われわれの学校には必要なんだ。」）とまで言われる。一介の生徒に教育長が直々に説諭する、この異例の面談は、フィンの就職を聞いた教員が校長に話し、校長から教育長に話がつながったもの、と後日判明する。

労働者階級の、しかも移民、さらにイレブン・プラス失敗者とくれば、通常は高等教育の道は開けない。しかしフィンの素質を見抜き、可能性を信じて、その門戸を開ける力を与えてくれた教師たち。かれらの存在こそがフィンに、教員という仕事の素晴らしさを、身をもって証明した、といえるだろう。しかも彼の進学を、教育現場と教育行政が連携してまで後押ししたことには、階級的な不利をはねのける、そうしたロール・モデルがまずはパイオニアとして必要であった、格差社会の深刻さがうかがわれる。

教職へ進むことになった、この原点を、フィンは決して忘れない。第二作『丘を越え谷を越え』（*Over Hill and Dale*, 2000）では、州の視学官になってからも視察先で、老教師に「どうせ劣等生の集まり」と見切られ、旧態依然の授業に甘んじることを強いられた生徒たちの姿を目にすると、その学校の校長に義憤を爆発させる。

> “These pupils...deserve better,” I said. “Now it’s my turn to sound pompous. I don’t mean to be but, like you, I do feel strongly about pupils who think they are failures.” (169)
>
> (「この子たちは…もっといい教育を受けるに値する」と私は言った。「今度は私が偉そうな口をきく番です。偉そうに言うつもりはないが、あなたと同じで私も、自分のことを失敗者だと思っている生徒には、強い思い入れがあるんです。」)

老教師の処遇に手を打つことを確約した校長が述べる次の教育観は、フィンとぴったり重なる。

> “...I do believe, you know, that those of us in education can really make a difference, particularly in the lives of less fortunate children, those who are labelled failures.” (171)
>
> (「…これは私の信念ですが、おわかりのように、私たち教育に携わる人間が本当に変化を起こすことができるのは、運に恵まれない子たち、失敗者とレッテルを貼られている子たちの人生なんです。」)

さらに続けてこの校長が明かすのは、自身の驚くべき出自であり、そこにこの教育観のルーツがあるとわかる。

> “My father was a miner, Mr Phinn, and I remember him returning from the pit in Maltby where I was brought up, weary and caked in black coal dust but always smiling and good-humoured. He had no degrees or diplomas but he was a well-read and intelligent man and always wanted me to do well at school. He’d never had the chance, you see. My mother was a school cleaner and she too gave me every bit of support and encouragement. She worked hard and long to buy me the grammar school blazer and everything else I had to have, and to keep me on at school. I try to make Sunny Grove like the good home that I was brought up in, a place where there is work and laughter, honesty and fairness. I think I owe it to my parents.” (171)
>
> (「私の父は炭鉱夫でした、フィンさん、モルトビーの炭坑から帰ってくる姿を思い出しますよ、私はそこで育ったのですがね、くたびれて石炭の粉で真っ黒になって、でもいつだって、にこにこ上機嫌。学位も免状もなかったけれど読書家で知的な人で、私には学校で頑張れと、いつも言ってました。ほら、自分は学校に行けなかったのでね。母は学校掃除婦で、やはり、ひたすら私を支えて励ましてくれました。グラマー・スクールの上着やら何やら、必要なものはみんな買って、私が学校をやめずにすむよう、身を粉にしてずっと働いてくれました。私はサニー・

グローブ校を、私が育った良き家庭のようにしたいんです。勤勉と笑い声、誠実さと公正さのある場所に。そんな理想が持てるのは、両親のおかげだと思います」)

この身の上話は、アイルランド移民の息子であるフィンの学校経験が、炭鉱夫の息子である校長のそれと通い合うこと、すなわち、英国社会の周縁としての移民と、炭鉱夫に代表される英国労働者階級[1)]が、学校教育においては同じ障壁を共有していることの証左である。しかも、その障壁を乗り越える力を校長に授けてくれたのは、ほかならぬその、経済的には恵まれない家庭であったことをも示している。それと同じことが、じつはフィンの家庭にも言える。フィンはこの第二作の献辞を、こう記しているのである。

For my mother and father, Pat and Jimmy Phinn,
My first and best teachers (v)

(母と父、パットとジミー・フィン、
私の最初で最高の先生たちに。)

つまりは、いずれの場合も、家庭の教育力が成功の土台となっていたのだ。

このように「教師が世界一の仕事」というフレーズは、学校教育から家庭教育の場にまで及ぶ幾重もの意味で、社会的に不遇な階層に対してこそ、その境遇から飛び立つための希望の灯として機能するのである。

2-2　初任者教員の現実

母校と町の期待を担って教員となったフィンは、しかし新任早々困難な現実に直面する。教員一年目の担任クラスは、英語のわからない移民の生徒だらけだったのだ。母国語がパキスタン語、ネパール語、シーク語、ウルドゥー語、中国語、アラビア語などの生徒たちに、フィンは定期的に補習を組む。当初、生徒たちはそれぞれの自国語に固執し、英語学習に反発して、宿題をやってこない。フィンは怒った。後にも先にも、その時だけ。『谷の裏側』では、何年も後に再会した卒業生の口から、当時のことが語られる。

"You asked how did we expect to learn English unless we were prepared to put some time and effort in and to practice using the language...It was the only time you shouted at us, Mr Phinn...You didn't make a habit of it. We all of us knew that you gave up a lot of your time to help us and we were very grateful. You were a really good teacher and we loved your lessons." (246-247)

(「時間をかけてがんばって、使う練習をする気がないんなら、どうやって英語を学べるっていうんだ、って…先生が声を荒げたのは、その時だけでした、フィン先生…いつも怒鳴ってばかりなんてこと、なかったし。先生が、自分の時間をなげうって助けてくれてるんだって、私たちみんなわかってたし、とってもありがたく思ってました。先生はほんとにいい先生だったし、私たち、先生の授業、大好きでした。」)

そして、こう回顧する元・女生徒が、現在はなんと英語の教師になっていることが明かされる。この初任者時代の教え子たちは、ほかにも大学入試資格試験に英語で合格したり、看護師になったり。グレていた男子も、青果輸入販売チェーンを起業して社長になり、高級車も妻もある立派な暮らしをしていたり。そうした出世を可能にしたものが何だったのかは、かれら自身の次のようなことばが語っている。

"You did an *excellent* job and I shall always remember your lessons." (243)

(「先生がしてくれたこと、ほんとに最高だったし、先生の授業、ずっと忘れません。」)

"Aye, well, I reckon you and t'rest of t'staff 'ad yer 'ands full wi' me and no mistake. I were a bit of a tearaway. You were all reight though, Mester Phinn. You were strict but fair and you were all reight. I never did get mi 'ead round old Shakespeare but I did enjoy them English lessons." (244)

(「ああ、そう、たしかに先生たち、おれには手を焼いてたね、まちがいなく。おれってば、ちょっとしたチンピラだったしな。でも先生はいい先生だったよ、フィン先生。厳しかったけどフェアだったし、いい先生だった。おれ、シェイクスピアにはぴんと来なかったけど、英語の授業はほんと、楽しかった。」)

フィンの献身と授業力は、自分以上に社会的ハンディを負う、有色人種の生徒たちの未来をも切り拓いたのであり、これが初志をさらに強めることになる。

The memories had reminded me why I had come into education and why those who teach the young take on the most satisfying, challenging, and perhaps the most important role in society. (247)

(この昔話で私は思い出した、なぜ自分は教育の世界に入ったのか、なぜ若者を教える人は、社会で最も満足できる、最もやりがいのある、そしておそらく最も重要な役割を担っているのかを。)

フィン着任時の1960年代には、こうした生徒の人種構成にも表出しているように、ロザラムはかつての「アイルランド移民の住む貧しい地区」から「パキスタン系の多い移民の町」へと変容しつつあった。そして現在は2014年に公表された「ロザラム児童性的虐待事件（Rotherham child sexual exploitation scandal)」で、全英ばかりか世界的に悪名を馳せるに至っている。これはパキスタン系の男性集団による組織的広域犯罪で、1997年から2013年までの性的虐待(強姦・集団強姦・誘拐・拉致・拷問・人身売買）の被害者数は、白人少女だけでも1400名、アジア系少女はもはや把握不可能な規模。警察・議会が長期にわたり事態を放置・隠蔽していたことも含め、英国移民社会の闇として一大スキャンダルとなった[2)]。

このロザラムの行政当局の怠慢と地域社会の腐敗を、見過ごせずに立ち上がり、政治家に転身

した教員がいる。ミック・バウアー（Mick Bower）は2018年５月、バーンズリー、ドンカスター、ロザラムの３町を併合してのシェフィールド市区の発足に伴う初の市長選挙に、ヨークシャー党（Yorkshire Party）から立候補。開票結果は候補者７名中４位で、当選は果たせなかったものの、労働党・保守党・自由党の三大政党の候補者たちのすぐ下、緑の党の候補者よりも上、という順位は、初出馬にしては健闘した、というべきだろう。

このようにフィンの出生地ロザラムの社会状況は現在､好転どころか悪化の一途ですらある。「教育が世界で最上の仕事」ということばが、ここほど痛切に必要とされるところはない。その重い荷を敢然として負おうとする、ミックのような教員の存在には、フィンの初任者時代の情熱と心意気に通ずるものが察知されるのである。

2-3　視学官の道

ミックが市長をめざし、地方行政のトップの位置から教育現場に最大限の影響力を及ぼすことを試みる途上であるのに対し、フィンは30代で州の視学官に志願して登用され、教育現場に寄り添うアドバイザーという形で教育行政に乗り出す。いわば「先生の先生」である、その仕事は、やりがいも苦労も「先生」に倍するものがあった。

『丘を越え谷を越え』第17章では視察先の校長が、現場の辛さと教育への絶望感を訴える。毎朝なにかしらのクレームをつけに押しかける母親の一人は、学校提出書類に「父親不明」と書いて恥じないシングルマザーで、娘が学校でシラミをうつされた、と文句をいい、もう一人は、娘が他人のパンツをはいて帰ってきた、と噛みつく。このモンスター・ペアレント対応に疲れた校長の嘆きは、フィンの教職志望の動機と真っ向から対立する。

> “I became a headteacher, Mr Phinn, to educate the young, to teach children, but what do I have to deal with, day in and day out? Nits and knickers, that’s what.” (232)

> (「私が校長になったのはね、フィン先生、若者を教育するため、子どもたちを教えるためでした、なのに毎日毎日、何に追いまくられてるか？シラミと下着、ときたもんだ。」)

さらに校長は、児童たちの家庭環境や社会環境を理由に、この子らには何も期待できない、と言い捨てる。

> “This job gets more and more difficult. The stresses and strains, the pressures and problems I have to cope with...But look at where these children come from. I mean, what can you expect?” (240)

> (「この仕事はきつくなるばかりです。つきあわなきゃいけないストレスと緊張、プレッシャーに厄介事ときたら…でもこの子らの出自を見てくださいよ。ほら、何が期待できるっていうんです？」)

そこにこそ、フィンは猛然と反論する。そこにこそ、彼の青雲の志は立ったのだから。

“Mr Sharples,” I said slowly, “surely that is what good teachers do—they have high expectations. They expect the moon. Now I appreciate the many pressures and stresses in education at the moment, but anyone who becomes a headteacher must realise that dealing with difficult parents, interfering governors and critical school inspectors is part and parcel of the job.” (240)

(「シャープルズ先生」私はおもむろに切り出した。「まさにそれが、良い教師のすることです——望みを高く持つんです。月に届くくらい高く。教育にはプレッシャーやストレスはつきもので、目先のあれこれはさぞ大変でしょう、でも校長になる人はだれでも、わかってなくちゃいけません、めんどうくさい保護者や、いちいちうるさい理事や、けちをつけてくる視学官に対処するのが、校長という仕事の、本体で要なんだってことを。」)

このように、視学官として多数の多様な学校現場を巡回し、さまざまな困難に出会うことで、フィンの信念はむしろ磨かれ、強まる。それが障碍児教育にも広がる様子が、同書の第21章、特別支援学校視察の場面に描かれる。５歳でポリオを罹患した女性教師の持論は、フィンのものと実によく呼応する。

“They’re an extremely talented group. In my opinion, what stops children like this achieving is not lack of ability but other people’s low expectations of them...‘Well, of course, he’s handicapped,’ they used to whisper. ‘I mean, what can you expect of her?’ That’s what they used to say about me, so I know how it feels...and then I met this fantastic teacher...and this brilliant physiotherapist...and they changed my life. They built up my self-confidence and believed in me.” (284–285)

(「この子たちは、きわめて才能に恵まれた集団です。私に言わせれば、こういう子たちが何も成し遂げられないのは、能力が足りないからじゃなく、ほかの人たちがろくに期待しないからです…『ああ、そうだよね、あの子、障碍児だもの。』とこっそり言ったり。『ほら、あの子に何を期待できるっていうのさ。』そんなふうに人は私のことをよく言ったものです、だからそれでどんな気持ちになるか、私にはわかるんです…それから私はこの素晴らしい先生と…すごい理学療法士に出会って…二人が私の人生を変えました。私に自信を持たせてくれて、私にはできるって、信じてくれたんです。」)

この教師に語るフィンのことばは、彼の持説がさらなる普遍性を獲得することを示している。

“I think what you say, however, applies equally well to all children, whether disabled or not. High expectation and high self-esteem seem to me to be the keys to success in learning.” (285)

(「でも、あなたの言うことは、すべての子どもにも、よくあてはまると思いますよ、障碍のあるなしにかかわらず。高い期待、高い自尊心、それが学びにおける成功の鍵だと、私には思えます。」)

こうしてたどりつくフィンの理想は、すべての子どもに良い教育を、という公教育の基本理念に立ち返る。イギリスという階級社会において「すべての子ども」と総称するには、恵まれた子どもたちの補集合にこそ、重点的に社会的リソースを充当する必要がある。人的資源も、財源も。最も顧みられない、それゆえに最も伸びしろの大きい階層や条件の子どもたちにこそ、公教育は行き届き、変化や奇跡を起こしてしかるべきである――そうした意味で、「先生が世界で一番いい仕事」ということばは、社会的弱者の子どもたちの教育においてこそ、輝くのだ。

しかしフィンの目の前で、時節はこれとは全く逆の方向に、容赦なく動いていく。サッチャー政権の教育改革は、これとかけ離れた主義主張のもと、まるで違う方針で、はるかに異なる目標へと向かっていくのである。

3．サッチャー教育改革――時代的状況

3-1　教育予算削減と効率主義導入

国有企業の民営化と規制緩和で市場原理を導入するサッチャー政権は、教育政策にも経済政策と同様の効率主義と競争原理を持ち込む。

イギリス個人主義・経験主義の伝統にのっとる学校教育は従来、学校や教員の独自性・自由度が高く、地域や児童生徒の個性・実情に合わせ、弾力的かつ創造的に実施されることを是としてきた。カリキュラムも教科書も授業方法も教員次第の、そうしたきめ細かな指導・運営の方式を、「経費の無駄」と斬り捨て、画一的な全国共通学習指導要領（National Curriculum）と全国統一学力試験（National Test）を制度化し、国際競争力の向上を目指したのが、サッチャー教育改革である。

この政策は、日本の高度経済成長時代の受験戦争における塾（juku school）をひとつのお手本としており（英国が見習おうとする頃には、日本はすでにそうした詰め込み教育の弊害に見切りをつけ、ゆとり教育へと舵を切ろうとしていたのは皮肉だが）、学力として数値化される指標を基準に、学校の教育活動の達成度がランク付けされた。同時に、学校運営が企業経営と同列に評価され、成果主義に基づいて、学校の統廃合が大規模に行われたのである。

英国病克服のための構造改革・財政緊縮の一環だったにしても、この教育予算の大幅削減策は、教育界からすれば、地域に根差して児童の個性を尊重してきた、古き良き英国の学校文化を破壊する、歴史的愚行なのだ。

産業界がコスト・パフォーマンスや利潤という形で短期的な成果を追求すればするほど、そしてそうした論理に教育界がなじまず、非効率であると譴責されればされるほど、そうではなくて「教育が世界で一番大事な仕事」なのだ、ということばは、時流にあらがう反抗と挑戦の響きを帯び、教育危機のこの時代だからこそ訴えなければならない、教育の存在意義を叫ぶ。この時機にあって、このことばは、損得勘定第一の実業界と政界を敵に回しての宣戦布告となるのである。

フィンの『小さな村の学校』シリーズ（*Little Village School* series, 2011–2016）は、この時期の学校統廃合のドラマを主筋とする。統廃合の対象になることを恐れ、落ち着きをなくす教師たち。合併が決まり、どちらの校長が残るかで起こる対立と軋轢。遠くからバス通学することになった児童たちの生活の変化。祖父の代から通っていた学校がなくなる、村人たちの寂しさ――効率最優先のはずの政策こそがじつは、教育現場に無用の混乱と余計な悶着を起こす、いかに非効率で不経済なものだったかを、克明に描いてみせるのだ。

その上、このシリーズの主人公の女性校長は、重度の自閉症児を持つ。田舎にそぐわないほどの華やかな容姿を持ちながら、村の小学校に赴任してきたのは、息子のいる特別支援寄宿学校に近いからであることが、次第に明かされる。自宅では生活できないほどの支援を必要とする息子だが、「施設に入所」しているのではなく、あくまでも「学校に在籍」しているのである。そしてその学校の教師が素晴らしい教育を行っている様子は、教育のプロである主人公をすら感動させる。気の遠くなるほどの長い時をかけて、何年にもわたる学校生活の中で、息子が見せたほんのわずかな表情の変化、かすかな反応の変化に、主人公は歓喜の涙を流す。この涙が、無駄なものだというのか。この息子が、無意味な存在だというのか――教育を序列化のレースに貶めて狂奔する政界・財界に向かってフィンの問いかける怒りの声が、聞こえてきそうなシーンである。

フィンの作品は、そうした抗議を芯に潜ませながらも、本人同様、声を荒げることはせずに、ただただ面白く展開していく。「世界で一番大事な仕事」の行われる「世界で一番大事な場所」が、楽しくて大切なところなのだ、と実感することで読者は、そこを脅かすものの気配を、よりリアルに身に迫るものとして受けとめることになるのである[3)]。

3-2　文学教育の軽視

政府による教育予算削減は、教育水準の低下に直結した。山口（2014）は1981年の政府視学官の年次報告の内容として、教員不足、特定教科の授業時数の減少・消滅、優秀児・不振児の特別指導の縮小、教科書・教材・学用品・設備・備品の購入予算不足を挙げており（129）、フィンの『デールズ』シリーズにも、前時代的な古い本しかない図書室の本棚、なかなか修理の入らない男子トイレ、校舎の老朽化による雨漏りの放置など、教育環境の劣悪化を示す例が散見される。

しかし教員および視学官として国語（英語）科を担当してきたフィンにとって、そうした教育条件の悪化と並ぶ重大な懸念事項は、実学重視の風潮による教育内容の変化――理系偏重と科目間格差の肯定、すなわち文学教育の軽視であったはずだ。

実利優先の価値観が教科の内容に及び、教科そのものを大きく衣替えさせてしまう例が、『丘を越え谷を越え』で登場する校長の感慨に見られる。

> "...it used to be called baking-time when I started teaching, then it was cookery class, then home economics and now, I believe, it's called food technology." (226)
>
> (「…私が教え始めた頃は『お菓子作りの時間』と呼ばれていたものですよ、それが『調理実習』になり、それから『家政学』になって、今じゃ、たしか『食品工学』っていうのよね。」)

家庭の風景がほのぼのと浮かぶような、歴史と文化の香りを伴う、暮らしを豊かにするイメージの呼称から、楽しさやコミュニケーションや芸術性の要素が次第に削がれ、理屈一辺倒の技術へと精製されていく過程がつぶさにわかる。科学の名のもとに人間性が除かれ、家庭科はキッチンから実験室へと場を移すのである。

これに類することが国語（英語）科においても起こっているのをフィンは目撃する。やはり同書で、単調でつまらない教科書の文章を"Bloody stupid!"（282）（「ばっかみてえ！」）と喝破する児童。非日常的なきれいごとで固めた「いい子ちゃん」の嘘っぽい話で、想像力を刺激することもない、文学の香りのかけらもない、ただ単語と文法を定着させるための文が繰り返し羅列され

た本文に、フィンは“The book *was* ‘bloody stupid’.” (282) (「その本は実際『ばっかみてえ』だった。」) と、同意せざるを得ない。

また、読書指導・作文指導に熱心な学校でも、詩が軽視されていて、あまり扱われていないことに気づいたフィンは、当該校にその旨を助言するにとどまらず、児童詩コンテストの審査員を務めたり、教員研修で詩の教え方のワークショップを開いたりする。このワークショップの評判が政府視学官の目にとまり、拡大することになるのは、イギリス全土において詩の教育が弱体化していたことの証である。

ことばを使う楽しさ、ことばを味わう喜びを教える詩の教育は、子どもの人格の根っこを豊かにする一生の財産、と文学者なら思うところだが、そうしたことばの創造性など金にならない、というのが時勢であった。

フィンは自分でも詩作に乗り出し、学校の子どもたちを題材にした愉快な詩集を多数出版する。オスカー・ワイルドに傾倒し、アイルランドの文人の血を継ぐ文学青年であったフィンは、詩人としても世に出て、その文才により、ことばの芸術性と娯楽性をみずから実演してみせるのだ。

そして詩以上に「役に立たない」と見放されはじめたのが、ラテン語・ギリシャ語の古典教育である。古典語が元来、イギリスのエリート教育の中心であったこと、伝統の継承と人格の陶冶の核であったことを思うと、隔世の感どころか危機感の迫る事態であるが、経済界は情報教育の方を優先する。これまで当然のように各校に配置されていたラテン語教師の枠を撤廃しよう、という動きも出てくる。そんな中、フィンの立ち会った採用面接で、一人の志願者の語る古典教育の意義は、この現代に燦然と光る。

> “A knowledge of Latin helps gain a good command of the grammar and vocabulary of our own language. Effective communication is very important in the modern world. It’s always impressive to hear English well spoken, don’t you think?...I also believe that we have so much to learn from studying the Greeks and the Romans. Take Aristotle, for example. He wrote a great deal about logic, metaphysics, physics, astronomy, meteorology, biology, psychology, ethics, politics, philosophy and literary criticism. His philosophy became the foundation for the Islamic religion and was incorporated into Christianity. Then there’s Socrates, such a clever, gentle and enigmatic man, very like Jesus... they were wonderful communicators, great teachers...they could use words in such a way that people’s lives were changed for the better. Surely learning about such men helps young people to live good, honest lives, to become more compassionate, truthful and humane.” (145)

> (「ラテン語の知識があれば、それが助けになって、私たち自身の国語の文法と語彙を上手に使いこなせるようになります。効果的なコミュニケーションは、現代の世界ではとても重要です。英語が上手に話されているのを耳にすると、いつだって感銘を受けますよね？…それに、ギリシャ人やローマ人のことを調べたら学べるものは、絶対たくさんあります。たとえばアリストテレス。彼の膨大な著作は論理学、形而上学、物理学、天文学、気象学、生物学、心理学、倫理学、政治学、哲学、文学批評にまで及んでいます。彼の哲学はイスラムの宗教の土台となり、キリスト教にも採り入れられました。それにソクラテスがいます、ほんとうに賢くて穏やかで謎めいた人で、キリストによく似ています…ふたりとも素晴らしい話し手で、偉大な教師で…人々の人生

が良い方に変わるようなことばの使い方ができた人たちです。そういう人物について学ぶことは、きっと、若者が善良で正直な人生を生き、思いやりと誠実さと人間性にあふれた人になるのを助けてくれるんです。」)

『丘を越え谷を越え』で並み居る面接官を黙らせたこの答弁は、サッチャリズムの文脈で見ると、実学偏重社会への痛烈な批判になっている。まず、ラテン語を土台にした言語能力こそが業務を円滑に進める――ことばをおろそかにしていてビジネスの成功はない、とも読める。また、高踏の人に見えるアリストテレスがじつは理系の学問を多数カバーしており、それが文系の学問あってのものだった――目先の役に立ちそうな細部に飛びつくような狭い視野では、その分野の本来のあり方すら見えない、と気づかされる。さらに、西洋哲学と西洋宗教の源流は、ふたりの偉大な教師にあった――教師という仕事の上に、現在の西洋世界が存在する、とわかる。それはつまり「教師が世界で一番大事な仕事」というフレーズの「世界」を、人類の世界史の規模に拡大するものである。この所信は、フィンの信条を、人間の生きるあらゆる時代に通ずるものへと、壮大なスケールで一気に普遍化する書き換えでもあったのである。

4．ヨークシャー――地域的状況

4-1　全英学力最底辺州

ヨークシャーで教えるということ――イギリスではこれが、じつはジョークになる。日本のことわざなら「糠に釘」というのに近い。この失笑を買うような試みに本気で乗り出していくフィンの奮闘は、風車に突進するドン・キホーテと同種の滑稽さを常に醸すのだ。

ヨークシャーとは、誰もが認める全英学力最底辺州である。たとえば2013年度のGCSE(General Certificate of Secondary Education)(義務教育終了時、16歳で受験する全国統一学力試験。成績評価A～G。大学進学希望者は8～10科目受験)で、英語・数学(コア科目)を含む5科目以上でA～C(上位合格)の生徒の割合が、ヨークシャーはイングランド最下位であり(Yorkshire Party HP)、学力が全国最低であることはデータから裏付けられる。

しかしそうした統計上の事実を待たないほどに、英国では昔から、ヨークシャーは名にし負う「愚民の地」であり、その趣旨のことわざや格言には事欠かない。

Yorkshire born and Yorkshire bred,
Strong in the arm...weak in the head. (Waites 15)

(ヨークシャー生まれのヨークシャー育ち、
力は強いが…頭は弱い。)

You can always tell a Yorkshireman...
but you can't tell him much. (Waites 15)

(ヨークシャー生まれは、すぐわかるけど、
そいつにものを言っても、すぐわからない。)

英国の民間伝承にはマザーグースの「まぬけのサイモン（Simple Simon)」や「ゴッサムの三賢人（Three Wise Men of Gotham)」、民話の「脳みそちょっぴり（Lack Wit)」など、村の名物としての「おばか」の言説が古くから豊富にあり、「ヨークシャーの田舎っぺ (Yorkshire Tykes)」は、その代表格、番付でいえば横綱級である。ポップソングでも、「丘の愚か者（The Fool on the Hill)」は（ガリレオのこと、というのが定説であるが）ビートルズがよく歌詞にマザーグースのパロディを入れることを踏まえ、フィンの作品の表題に頻出する「丘 (Hill)」と照らし合わせると、まずは「ヨークシャーの阿呆」を連想させる題であることが英国民の暗黙の了解、と推測される。

この固定観念の根強さは、ご当地ヨークシャーの言い伝えの自虐ぶりにも出ている。

If tha' knaws nowt, say nowt, an 'appen nobody'll notice.（トゥーヒグ260）

（なんも知らねんだば、なんも言うな。せば、だれさも、わからねべ（おめえが馬鹿とは)。）

The best place to find a helping hand is at the end of your arm.（トゥーヒグ258）

（手を貸してほしいなら、自分の腕の先を見るのが一番（そこには自分の手が見つかる)。）

これらは「おばか」なりに頭を働かせてみた、「おばか」ならではの素朴な知恵ではあるものの、こうしたローカル・ルールは、巷間の偏見に屈し、旧弊な価値観に甘んじる、保守的なあきらめでもある。それはフィンのことばでいえば「低い期待（low expectation)」にほかならないのだ。

「教育が世界で一番いい仕事」ということばが、ここほど切実で、また、ここほど勇気あることばとなる州はほかにない。フィンの所信は、次のヨークシャー党の政治綱領とも一致する。

Education is an absolute priority for the Yorkshire Party. Every young person in Yorkshire deserves an outstanding education—it is a moral imperative for Yorkshire....（Yorkshire Party HP）

（教育こそヨークシャー党の絶対最優先事項である。ヨークシャーの若い人ひとりひとりが、優れた教育を受けるに値する――それはヨークシャーにとって、道義的急務なのだ…。）

教育がヨークシャーでは「人の道からいって、ぜひとも取り組まなければいけないこと（a moral imperative)」である、というのは、教育がヨークシャーではもはや人権問題ですらある、ということだ。人を人として扱うこと、尊重すること、可能性を信じること、そうした根本的なことからスタートすることが求められるヨークシャーとは、最底辺であるだけに教育の原点を見つめることになる場所だったのである。

4-2　農業と牧畜業の州

ヨークシャーの学力の低さは、もともと学業成績に執着しない土地柄から来ている。歴史的に農業・牧畜業・炭鉱業が中心産業であり、労働者階級の子どもたちの就職先は自宅や地元の農場・

牧場・炭鉱が大半であったため、勉学意欲は希薄で、上級学校への進学は進路の選択肢になりにくく、結果として学歴の低い人口の比率が高くなる。

しかし州民の知性が低いわけではなく、むしろ潜在的能力はきわめて高い可能性があることが、フィンの作品の随所で示唆される。『谷の裏側』で、視察先の学校の児童たちは、農業に関しては大人も顔負けの高い専門知識と豊富な経験を有しており、かれらは一様に、無知な視学官に憐みと蔑みと諦めの目を向けて、“Off-comed-un!”（271）（「よそもんが！」）とため息をつくのだ。

同書で、就任直後のフィンは、訪問先の学校の児童に音読してもらう本に『ピーターラビットのおはなし』（*The Tale of Peter Rabbit*）を選ぶ。この全24巻セットがイギリスでは出産祝の定番で、子どもに好かれる本の代表、人気の鉄板だったはずが、ヨークシャーでは通用しない。この名作にして児童書の古典が、ここの小さな農夫・農婦たちには、ばかげた感傷のたわごとでしかない。かれらの逆鱗に触れてしまったフィンは、まったく想定外だった反応にとまどうのである。

> “What a terrible thing it would be,” I said, hoping to encourage him on again, “if poor Peter Rabbit should be caught.”
>
> “Rabbits! Rabbits!” cried the angry-faced little lad, scratching the tangled mop of hair in irritation. “They’re a blasted nuisance, that’s what my dad says! Have you seen what rabbits do to a rape crop?...Rabbits with little cotton-wool tails and pipe-cleaner whiskers,” he sneered, “and fur as soft as velvet. Huh! We shoot ’em! They can eat their way through a rape crop in a week, can rabbits. Clear nine acres in a month! Millions of pounds’ worth of damage when it’s a mild winter. No amount of fencing will stop ’em.”
>
> “We gas ours,” added the little girl of about ten....
>
> “Nay, Marianne,” retorted the boy curling a small lip, “gassin’ doesn’t work.” Then looking me straight in the eyes, he added, “Never mind poor old Peter Rabbit. It’s Mr McGregor I feel sorry for—trying to grow his vegetables with a lot of ’ungry rabbits all ovver t’place!” (51–52)

> （「なんて、おっかないことだろうね」と、私はその続きを読ませたいと思い、声をかけた、「かわいそうなピーターラビットが、つかまっちゃったりしたら。」
>
> 「ウサギ！ウサギかよ！」と、その男子は怒りを顔に露わにして叫び、苛立ちのあまり、もしゃもしゃの髪の毛をかきむしった。「あんなの、くそいまいましい、やっかいもんだ！おっ父はそう言ってるだよ！ウサギが菜の花の収穫に何しやがるか、見たことあるか？…ちっちゃな綿毛のしっぽと、こよりのおひげのウサギちゃんがよ」と、せせら笑ってその子は言った、「毛はふわふわでビロードみたい、とくらあ。はん！うちじゃ、射殺してるだよ！あいつら、菜の花の収穫を１週間で食い尽くしやがる、そんくらいできるんだよ、ウサギはよ！１か月で９エーカーがパーさ！暖冬には何百万ポンドもの損害だ！どんだけ柵を作っても防げねえ。」
>
> 「うちじゃ、ガスで殺すわ」と、その10歳くらいの女子は言い添えた…。
>
> 「うんにゃ、マリアン」と、その男子は小さな唇を歪めて言い返した。「ガスなんかじゃ、足りねえだ。」それから私の目を真っ向から見返し、駄目押しにこう言った。「かわいそうなピーターラビットちゃんなんざ、気にするこたあねえ。かわいそうなのはマグレガーさんのほうだべ――はらぺこのウサギがそこらじゅう、うじゃうじゃいるとこで野菜を作ろうなんてよ。」）

この農家の子女たちにとって、ウサギはペット（pet）ではなく害獣（pest）であり、動物は愛玩するものではなく生活の糧であることが、『丘を越え谷を越え』の以下の場面でもわかる。

...the little angel sitting next to me whispered shyly, “I like rabbits.”
“So do I,” I replied.
“My daddy likes rabbits too.”
“Does he?”
“And my mummy likes rabbits.”
“That’s nice.”
She took a mouthful of meat and potato pie before adding quietly, “They taste really good with onions.” (51–52)

(…隣にすわっていた小さな天使のような子が、内気そうにささやいた。「あたし、ウサギ、好き。」
「私もだよ。」と私は応じた。
「パパも、ウサギ、好き。」
「そうなの？」
「ママも、ウサギ、好き。」
「それはいいね。」
その子はミート・ポテト・パイを一口ほおばると、そっと言い足した。「タマネギに合わせると、すごくおいしいもの。」)

ウサギ駆除のエキスパート、羊の品種の判別に長けた子、家畜の種付けに詳しい子。視学官そっちのけで農場についてのおしゃべりに興じる児童たちは、その勢いも内容も一人前の農夫並み。このように感傷抜きで動物と自然に日々向き合う生活が、じつは独特の骨太な文学的感性につながっていることを、フィンは発見する。

同書の第４章、詩の模擬授業をしに行った学校でフィンが見たのは、子どもたちの力強い詩にあふれる、逞しい農民魂だった。「名画を見て詩を書く」という授業をしたフィンは、いくつもの傑作に出会う。たとえば、ドガの「アイロンをかける女たち」を題材にした児童の作品。

She yawns with a mouth like a gaping cave,
In a face as fat as a football.
She has the fists of a boxer
And arms as thick as tree trunks.
It must be all that ironing. (48)

(女のあくびする口は、洞穴の入口みたい。
顔は丸々、サッカーボールなみ。
両のこぶしは、ボクサーのもの、
腕の太さは、木の幹くらい。

ああしてアイロンかけてるからだね。）

自然やスポーツの比喩による、頑健・強壮な肉体のイメージ。画面の人物の腕力と握力、疲労感と生活感を見抜いての、労働への共感。この地方ならではの子どもの感受性と想像力と創造性が、この詩にはあふれている。

全国統一学力試験の結果に出ないところで、サッチャー時代の軽視する文学の分野で、ヨークシャーの知性は豊かに息づいている。そのように数値にならない、データに載らない、埋もれている個性と才能の存在を世に示すには、ここでフィンがしているように、小説という表現形式が最適だったのだ。そして子どものそうした能力と可能性を存分に引き出すためにも、やはりここでこそ、「教育が世界で一番大切な仕事」となるのである。

4-3　保守派の州

質実剛健で直截なヨークシャーの農民気質は、裏を返せば、頑迷で無遠慮。頭が固くて、口が悪い。新しいものや変化を受け付けない保守性。英国人一般の控えめな物言い（understatement）を無駄な洗練と断じ、単刀直入を旨とする心意気。つまりは教育が最も浸透しにくいお国柄なのだ。

たとえば視学官秘書は気がよくて有能だが、ぶしつけなまでに、あけすけ。教員研修所の気難しい掃除婦も、ぶっきらぼうで、ずけずけ。こうした物言いが、ヨークシャーでは“not backwards in coming forwards”（前に進むのに、後ろに下がったりしない／出ていく時に、引っ込まない）という成句になっているくらいである。

『丘を越え谷を越え』で、ある小学校の理事長は、無教養で無骨で、視学官にも時流にも露骨に反発する。その偏屈な長広舌は、当地の守旧派の固陋な見方と反エリート主義を代表している。

> The Chairman, who clearly thought that school inspectors were part and parcel of some conspiracy to depress standards and were largely responsible for all the ills of society, continued to harangue me.... In his opinion it was all the fault of the “educational establishment”. It was the “long-haired professors” and “trendy, bearded progressives” who were to blame with “their wishy-washy, airy-fairy ideas”. (82)

> （この理事長は、視学官というものは教育水準を下げようともくろむ陰謀の張本人で黒幕で、社会の害悪はすべて視学官の仕業だ、と見るからに思っていて、制止されても聞かず、私に向かってまくしたてた…この御仁に言わせれば、なんでもぜんぶ「教育を牛耳ってる上のやつら」のせい。「髪の長い大学教授」や「流行かぶれの、ひげを生やした進歩派の連中」が「根性なしで腰抜けの、ふわふわチャラチャラした考え」を言い出すせいなのだった。）

同書では、フィンの上司までが、視学官の新採用人事で女性を優遇する「積極的差別撤廃措置（affirmative action）」は期待できない、と認め、“This is Yorkshire after all.”（174）（「ここは所詮、ヨークシャーだ。」）と現実を直視する。

この教育困難州で教育を指導する人材には、何が求められるのか。『谷の裏側』では、フィンの採用された理由が明かされる。博士号を持つ識字障害の専門家など、高学歴の候補者たちを尻目にフィンに白羽の矢が立ったのは、ここの人々と同じ目線で、同じ土俵に上がり、がっぷり四つに

組んでいける、飾らない実直な人柄、すなわち、ある意味ではフィンのつつましい出身階級のおかげでもあったのだ。

“We liked your answers and thought they were very sensible and honest and to-the-point. We think you'll get on with the children and the teachers and be a real asset to the county. We're a plain-speaking people in this part of the country, Mr Phinn, and we can't be doing with folk who think they are God's own gift to education. No disrespect to some of the other candidates but we don't put people on pedestals in Yorkshire—they nobbut want dustin'.” (21–22)

(「私たちは、きみの受け答えを気に入ったし、とても思慮深くて率直で、的確な答えだと思った。きみなら、ここの子どもたちや先生方とうまくやっていくだろうし、この州にうってつけの人材だと思う。この地方の人たちは歯に衣着せないからね、フィン先生、だから、自分は神が教育界に賜った天才だ、なんて思うような御方とはやっていけないよ。その手の応募者を軽んじるわけじゃないが、ヨークシャーじゃ、人を台座に載せたりしないのさ——そんなやつらだば、うっちゃるしかねえべ。」)

現場に出たフィンは、その期待に十分に応える。要改善点をずばずば指摘していくフィンの忌憚のなさは、筋金入りのヨークシャー人たちも苦笑するほどであることが『丘を越え谷を越え』には描かれる。

“But times have changed, Councillor,” I said and, taking a deep breath, continued, “and a lot of the old school methods and ideas are inappropriate in this day and age. I'm afraid I did not find Mr Swan a good teacher and shall be describing his very poor lesson in some detail in my report.”

“Oh dear,” I heard Mr Fenton murmur.

Councillor Peterson's jaw dropped. “By the 'eck, Mester Phinn,” he chuckled, “tha' dun't mince words. Thar a regular Yorkshireman and no mistake....” (163)

(「でも時代は変わったんです、評議員さん」と私は言い、大きく一息吸い込んでから、先を続けた。「だから、その昔流のやり方と考え方の多くは、いまのこの時代には不適切です。残念ながらスワン先生をいい先生とは思いませんでしたし、彼の非常に劣悪な授業については報告書に詳しく書くつもりです。」

「なんと、まあ」とフェントン校長のつぶやくのが聞こえた。

ピーターソン評議員は、ぽかんと口を開けた。「いやはや、フィン先生よ」と含み笑いして、「おめえさん、ずばっと言いなさるのう。本物のヨークシャーもんだ、まちげえねえ…。」)

言いにくいこと、耳の痛いことも、同じヨークシャーの人間どうし、仲間うちなら、話は通る。フィンの仕事を支えるのは、そうした同郷の連帯感なのだ。それは子ども相手でも同様である。同書で特別支援学校を視察するフィンに、視覚障害の女児は、姿は見えなくても信頼感を寄せてこう言う。

“He’s from Yorkshire so he should be all right, shouldn’t he, miss?” (286)

(「その人、ヨークシャーの人なんだから、いい人に決まってるわ、そうよね、先生？」)

ちなみにヨークシャー方言では、“all right”は最大級の賛辞なのだ。

頑固一徹な保守派の州、このヨークシャーで、教育の仕事をするということは、並大抵の苦労ではすまない、途方もない難業に思えるが、フィンはこうして着実に草の根で実績を重ねていく。そうしたミクロの視点での小さな歩みを記録し公開していくのには、文学は絶好の媒体であった。フィンの物語を追いつつ、フィンと共に一校ずつ巡回訪問をする読者には、この地方にあっても「教育が世界で一番いい仕事」ということが、次第に冗談でも皮肉でもなく、確かな手ごたえと足がかりと希望を伴うものとして感じられてくるのである。

4-4　自然景観世界一の州

ヨークシャーを語るのに忘れてならないのが、その名立たる絶景である。日本ではエミリー・ブロンテの『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847) の影響か、荒涼たる荒野のイメージが突出しているようであるが、ヨークシャー・デールズ国立公園に代表される田園地帯は、スケールの大きいダイナミックな景観と、四季折々の美しさに彩られる牧歌的な小村の数々を併せ持つ、英国でも有数の景勝地である。その豊かな自然ゆえに、ヨークシャーは“God’s Own Country”(神のお膝元)を自任し、州民は“The Lord is a Yorkshireman.” (神様はヨークシャー出身) と言い伝えるほど。すなわち、ここの人々にとって、ヨークシャーの自然景観は世界一なのである。

視学官に就任して州内の各校を回り始めたフィンは、しばし周辺の景色に見とれて時を忘れる。『谷の裏側』では、そんなフィンの腕を女子児童がぽんぽん、と優しくたたき、こう声をかける。

“Are tha’ comin’ in then, mester, or are tha’ stoppin’ out theer all day admirin’ view?” (49)

(「んだば、中さ入るだか、おじさん、それとも、一日中、外さ立ってて、そこで景色っこ、ながめてるだか？」)

同書では、春の野を行く当地の領主が、車で随行するフィンに“The best place in the world, Mr Phinn. The best place in the world.” (248) (「世界一の場所だよ、フィン先生、世界一の場所だ。」) と嘆息する。

『丘を越え谷を越え』では、新任視学官が、風景のみならずウサギのボクシングまで目撃し、“It’s like sitting on the roof of the world.” (228) (「これって、世界の屋根に座ってるみたいだわ。」) と驚嘆する。

同書中の、以下のフィンのことばは、そうした感慨を要約している。

It was at times like this that I realised how fortunate I was to have a job which enabled me to see much beauty day after day. Such sights never failed to fill me with awe. (283)

（この仕事についている自分がどんなに幸運か、気づくのはこんな時だった。来る日も来る日も、たくさんの美が見られるなんて。そうした光景にはいつだって、畏敬の念でいっぱいになるのだった。）

風光明媚なこの地で教育に携わることの幸福を謳歌するかれらに、「教育が世界で一番いい仕事」ということばは、掛け値なしに、このヨークシャーでこそ真価を発揮する。それは、人と自然が調和し、神に見守られて生きている、という実感であろう。

政教一致の英国では、公立学校は英国国教会の宗教教育を行っており、カトリック系の私立学校もフィンの視察先には含まれる。いずれも朝は讃美歌で始まるが、同書でフィンが訪問する小学校は、なにしろ農牧業のこの地、讃美歌も動物系で“All things bright and beautiful, All creatures great and small”（233）（「すべて、輝ける美しきもの、すべて、大きい生き物も小さい生き物も」）であったりする。これは、ヨークシャーの獣医ジェイムズ・ヘリオット（James Herriot, 1916–95）の小説のタイトルになった歌でもある。*All Creatures Great and Small*（1972）、*All Things Bright and Beautiful*（1974）以降の「ドクター・ヘリオット」シリーズは、農場の家畜の診療・検診・出産をめぐる抱腹絶倒のユーモア小説でありつつも、表題に象徴されるように、自然の中の命の神秘に対する敬虔な宗教心が、その底を流れている作品である。

そして、このヨークシャーにおいて、自然と一体化した動物たちに向けるヘリオットのまなざしと、自然とともに生きる子どもたちに向けるフィンのまなざしには、じつは通い合うものが見出される。それはフィンのことばで言えば、その存在に対する“awe”（畏敬の念）であり、『谷の裏側』での、以下の神父の所感は、それを代弁したもの、と捉えることができる。

“The young child is the greatest philosopher of all...He or she is open minded, trusting and honest, and greets people without any pre-conceived opinions. They see the world as it is—something wonderful and new and full of excitement.”（148）

（「子どもは最も偉大な哲学者です…子どもは心を開いていて、人を疑わず、正直で、何の偏見も持たずに、人と向き合います。子どもは世界をありのままに見るのです――不思議で、新鮮で、わくわくすることがいっぱいのものとして。」）

「神のお膝元」で伸びやかに育つ、素朴で朴訥、素直で純真な、ヨークシャーの自然児たち。敬意と愛情のわいてくる、この子どもたちの天性が、この地での教育を、なおのこと「世界一の仕事」にするのだ。同書で、児童たちの羊談義にさんざんつきあわされ、てんてこまいの半日を過ごしたあとのフィンの感想が、それを雄弁に語っている。

I thought for a moment of Marianne and Tony and John and all the other amazing children of the Dales I had met that morning...How very fortunate I was to meet such people...I knew I was going to like my new job.（56）

（私はしばし、マリアンにトニーにジョン、そして今日の午前中に会ったほかのすべての、デー

ルズ地方の驚くべき子どもたちのことを思った…こんな人たちに会えるとは、なんて本当に幸運なんだろう…私にはわかった、この新しい仕事が好きになるって。)

このようにフィンが、この地域ならではの魅力と喜びを発見することで、その教職観に新たな輝きを加えることができたのは、教育現場を見る目の中に、何が起ころうともその現実を受けとめて面白がることのできるイギリス人のユーモア感覚、そしてそれを後年こうして小説化したことにも証される文学的感性があったからなのである。

5．結

フィンが小説家としての出発点に掲げた『谷の裏側』の献辞は、教育という「世界で一番大事な仕事」を共に担う仲間の教師たちへ、文学という形でこそ伝えられるものを贈り、それによって、この仕事が至難となる社会・時代・地域の状況を乗り越えていく力を与える、応援と連帯のメッセージだった。それは、作者にして主人公のフィンひとりにとどまらず、クリスティーンやほかのすべての教師たちが同様に奮闘していることへの理解と称賛であり、そこには、教員という道を選んだ者どうしのチーム感ともいうべきものまでが醸されている。

絶世の美女でありながら気取らず取り澄まさず、子どもたちに慕われ愛されるクリスティーンは、このヨークシャーの地に足のついた校長の理想型として、巻頭のカメオの座に配されている。体裁や虚飾を嫌う彼女は、上流階級の裕福で傲慢な男前のボーイフレンドを袖にして、見栄も張らない、格好もつけない、誠実で篤実なフィンを夫に選ぶ[4)]。つまり彼女は、この地でこの職業に身を捧げて生きていこうとする者として、同志の代表なのだ。彼女が具体的な固有名詞、かつ伏線として登場することで、この銘文は物語の内容とあいまって、読者にとって現実感と説得力をいや増していく仕掛けなのであった。

そして作品の登場人物としてのフィンの機能は、はからずも、その名前に宿っている。「ジャーベイズ（Gervase)」とは珍しいファースト・ネームだが[5)]、その由来は『谷の裏側』で視察先の校長に説明する形で明かされる。暴君ネロに処刑された古代ローマの殉教者が聖ゲルヴァシウスで、中世にはよくつけられた名であり、文字通りの意味は「槍を運ぶ兵」だ、というフィンに、校長は “‘Spear carrier’ eh? Well, that’s very appropriate for a school inspector.” (68)（「『槍兵』ですと？ああ、そりゃあ、視学官にはどんぴしゃですな。」）とほくそ笑む。鋭いことも言わなければいけませんからね、と恐縮するフィンだが、校長の真意は「下手な槍も数投げりゃ当たる」という、えらく失礼なものだった。

この校長の見方の通り、まずは視学官としての槍兵フィンが直接ねらう標的は、もちろん学校である。しかし作中で彼が身を投ずる奮戦の真の相手は、学校以上に、前掲の社会的・歴史的・地理的条件であり、その矛先は物語を突き抜けて、本の外部に存在する政権や体制や因襲にまで刺さる。つまりフィンの格闘は、この社会と時代と場所において教育を守るための、教育の護衛兵としての大きな戦いだったのである。

アイルランド系カトリックの両親の敬虔と教養の賜物である、この殉教者の名は、しかし戦後のロザラムの町では相当に浮いていた。ロザラムで、この名で育つということ、それ自体が殉教者並みの大変さであったことが『谷への道』序盤に語られている。へんてこな名の、妙にきちんとして品のいい、大人並みの丁寧な口をきく男の子。少年時代のこのキャラが、先生受けのいい、教師

たちの目にとまりやすいものだったことが、彼の人生を変えるメリットになったのは間違いないのだが[6)]。

そのように、かつては周囲と微妙な距離のある優等生だったフィンが、視学官として、いまや歩兵さながら、悪路を押して進み、運動場を駆け回り、名実ともに泥にまみれながら、このヨークシャーの民、地の塩たる人々になじみ、添う[7)]。そこには地域との心からの一体感が生まれており、こここそが真に自分のフィールドであるという自負と意欲がみなぎっている。

このヨークシャー教育界の守護聖人にして守備隊の槍兵、ジャーベイズ・フィンの学校小説に一貫する教職観は、サッチャー時代が過去のものとなった今なお、そしてEUとの関係や移民問題等で英国の地歩が揺らぎ、教育界への影響が危惧される今でこそ、地域主義の旗印となり読者に——とりわけ教師たちに——勇気と希望を与えてくれるのである。

注

1）英国労働者階級における学校掃除婦の位置については、武田（2019）を参照のこと。

2）『丘を越え谷を越え』第20章には、フィンが視学官時代、視察先の教員の誤解で、誘拐犯に間違われて警察に通報される挿話がある。その教員の弁解にはすでに当時の性犯罪報道の多さが強調されており、地域的な危険性の予兆とともに、教育界を脅かす社会問題としての普遍性も見て取れる。

3）フィン作品における反サッチャー色の表現については、武田（2018）を参照のこと。

4）フィンとクリスティーンの結婚までの恋模様は、偶然の出会いから抱腹絶倒のプロポーズに至るまで、笑いとドラマの連続で、このシリーズをラブコメものとしても第一級にしている。また、クリスティーンの父親は元クリケットの名選手で、現在は地方の名士であり、フィンは結婚においても階級の壁を越えている。下剋上の野心やたたき上げの自負が作品に露出することはないが、政府が労働者の自助努力を盛んに奨励した時代であり、階級上昇志向の点では、サッチャーとパラレルな方向を、じつは向いていた、と見ることもできる。

5）現代では稀な名であるため、“Grievous”, “Gracious”, “Germane”, “Germain”, “Germinal”, “Gercase”, “Gerund”, “Gervarse”, “Geraffe”などと、よく間違われることが『谷の裏側』（59）で紹介される。

6）『デールズ』シリーズにも『小さな村の学校』シリーズにも、あきらかにフィン本人をモデルにした古風な秀才の男子キャラクターが登場し、オタクっぽさやエレガントさを発揮して笑いを呼ぶ。

7）悪路を押して学校訪問をする場面は『谷の裏側』第１章、悪天候の運動場で臨時代理のラグビー審判をする場面は同書の第11章にある。

参照文献

Herriot, James. *All Creatures Great and Small*. 1970, 1972, 1973; London: Pan Books, 2013.

---. *All Things Bright and Beautiful*. 1973, 1974; London: Pan Books, 2013.

---. *All Things Wise and Wonderful*. 1976, 1977; London: Pan Books, 2013.

---. *The Lord God Made Them All*. 1981; London: Pan Books, 2013.

---. *Every Living Thing*. 1992; London: Pan Books, 2013.

Phinn, Gervase. *The Other Side of the Dale*. London: Michael Joseph, 1998; London: Penguin, 2010.

---. *Over Hill and Dale*. London: Michael Joseph, 2000; London: Penguin, 2010.

---. *Head Over Heels in the Dales*. London: Michael Joseph, 2002; London: Penguin, 2010.

---. *Up and Down in the Dales*. London: Michael Joseph, 2004; London: Penguin, 2010.

---. *The Heart of the Dales*. London: Michael Joseph, 2007; London: Penguin, 2010.

---. *Road to the Dales: The Story of a Yorkshire Lad*. London: Michael Joseph, 2010; London: Penguin, 2011.
---. *Out of the Woods But Not Over the Hill*. London: Hodder & Stoughton, 2010.
---. *The Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2011.
---. *Trouble at the Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2012.
---. *The School Inspector Calls!* London: Hodder & Stoughton, 2013.
---. *A Lesson in Love*. London: Hodder & Stoughton, 2015.
---. *Secrets at the Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2016.
---. *The School at the Top of the Dale*. London: Hodder & Stoughton, 2018.
Potter, Beatrix. *The Tale of Peter Rabbit*. London: Frederick Warne & Co., 1902.
Waites, Brian. *Tykes, Dumplings and Scrumpy Jacks*. Cheltenham: Evergreen, 1993.

武田ちあき。「サッチャーのお化け――ヨークシャー学校小説シリーズによみがえる英国の幻」。『憑依する英語圏テクスト――亡霊・血・まぼろし』第８章。福田敬子・上野直子・松井優子・編。東京：音羽書房鶴見書店、2018。183-204。
---。「イギリス教育小説における学校掃除婦の表象――その文化的意味と政治的機能――」。『埼玉大学紀要（教育学部）人文・社会科学』第68巻、第１号、2019。271-284。
トゥーヒグ、カール・R。『イギリス英語Total Book』。東京：ベレ出版、2001。
内藤泰朗。「『白人少女1400人レイプ』異様な売春犯罪を常態化させた英国移民社会の裏側」。『産経ニュース』2014年12月24日。
〈https://www.sankei.com/premium/news/141224/prm1412240005-nl.html〉
ヘリオット、ジェームズ。『ヘリオット先生奮戦記』上・下巻。大橋吉之輔・訳。ハヤカワ文庫。早川書房、1981。
---。『ヘリオット先生の動物家族』。中川志郎・訳。ちくま文庫。筑摩書房、1989。
ポター、ビアトリクス。『ピーターラビットのおはなし』。石井桃子・訳。福音館書店、1971。
山口裕貴。「サッチャリズム教育政策とその背景――政治経済的条件からの概観的考察――」。『桜美林論考　自然科学・総合科学研究』第５号、2014。125-138。

“Education—Yorkshire Party.” Yorkshire Party. 20 May 2018
〈http://www.yorkshireparty.org.uk/education/〉
“Rotherham scandal pushed Mick into politics—Yorkshire Party.” Yorkshire Party. 20 May 2018
〈http://www.yorkshireparty.org.uk/child-grooming-scandal-pushed-mick-into-politics/〉
“Translate This.” *The Japan News* 18 September 2014: 11.
“About the Mayor.” Sheffield City Region. 19 August 2018
〈https://sheffieldcityregion.org.uk/about-us-governance-policy/about-the-mayoral-election/〉

（2019年１月28日提出）
（2019年４月19日受理）

The Best Job in the World:

Views on Teaching in Gervase Phinn's School Novels

TAKEDA, Chiaki
Faculty of Education, Saitama University

Abstract

This paper investigates the political functions of Gervase Phinn's view, "Teaching is the best job in the world," based on the discussion of its social meanings, historical connotations and geographical significances. This statement, originally by Phinn's teacher as an encouragement to take the job of teaching, always remains as Phinn's mainstay through his life first as a teacher, next as a school inspector, and now as a novelist. Although teaching may well be the best job in the world, in fact "the world" before Phinn's eyes presents particularly daunting challenges: deprived lives, difficult times and dejected places. That statement becomes all the more important and impressive especially in those adverse circumstances. Phinn's school novels depict his and many other teachers' brave and dedicated endeavours to overcome educational disadvantages for immigrant children, under Thatcherite reforms, and that in Yorkshire: the lowest ranked region in England for educational attainment. In Phinn's non-fictional stories, the reader can detect constant struggles to verify the ideal through many critical moments in daily settings. While his episodes and expressions are extremely funny, his plots and narrative earnestly restores and enhances personal dignity and regional pride of Yorkshiremen and Brits. His firm belief in the value of this vocation can be received by his twenty-first century readers as an illuminating revelation to equally hard times of today, when Britain faces unknown insecure realities to be brought by Brexit from EU.

Keywords: teaching, school novels, immigrants, Thatcherism, Yorkshire